寄稿

岩倉使節団が遺したもの――日本近代化への懸け橋 ⑥

ノンフィクション作家
泉 三郎

【最終回】

産業近代化を担った明治の群像

本連載の最終回では、前号に引き続き、日本の国の形をつくった群像に迫りたい。金融や税制など経済の近代化に貢献し、後に日本銀行の初代総裁となる英傑、自由民権運動から身を転じた実業家、官営企業の払い下げに力を注いだ硬骨漢。そして最後、「岩倉使節団が日本近代化を実現しえたのはなぜか」について考察する。

吉原重俊の多彩な活動 日銀の初代総裁へ

薩摩藩士の吉原重俊は、明治3年、藩の派遣留学生として米国のイエール大学在学中に、大山巌らの普仏戦争観戦武官団の通訳としてスカウトされヨーロッパに赴いた。その後フランクフルトのナウマン社に紙幣印刷の監督官として滞在中、岩倉使節団を手伝うためにワシントンに戻され、そのまま使節団の随員として三等書記官となる。そして条約改正の委任状を取りに帰国する大久保利通と伊藤博文に随行して東京・ワシントン間を往復する。

使節団には英国まで随行するが、ロンドンに残って多方面にわたる調査の仕事に就き、さらには英語ができて外交と経済に通じている人材は貴重なため、次々と起こる問題処理のために引っ張りだこの状況が続く。その東奔西走の仕事ぶりは目覚ましいばかりだ。明治6年の政変後は大久保に指名されて吉田清成とともに「立憲政体に関する建言書」の作成に従事し、その後、大蔵省の所属となり租税助と横浜税関長を兼任した。さらに地租改正事業に局長として従事、7年かけてそれを成し遂げた。そして明治10年からは内務卿の松方正義について西南戦争後のインフレ対策に挑み、松方のフランス・ベルギーの調査視察に同行する。その際、松方はフランスの蔵相レオン・セーと意気投合し、吉原もその傍らにあって多くのことを学んだ。

その後は、大蔵卿となった松方の日本銀行設立に全面協力、富田鐵之助らとともにその創立に邁進し、明治15年、38歳で日本銀行の初代総裁になった。大久保、松方という薩摩人脈の絆と豊富なキャリアがそうさせたものと思われる。総裁時代には、維新以来の懸案の問題、不換紙幣の回収、日本銀行発行の兌換紙幣との交換、近代的な手形・小切手の流通促進などを図った。明治18年には10か月半にわたり欧米を回覧、銀行制度の調査と外資導入の緒をつくったが、その過労がたたったのか42歳の若さで急逝する。

日本銀行の設立と金融システムの整備は産業の血液の循環器といってよく、この仕事がその後の日本経済の急速な近代化の礎になったことは明らかである。それは日本近代化のパイオニアたちの壮烈な戦死といってもよかった。

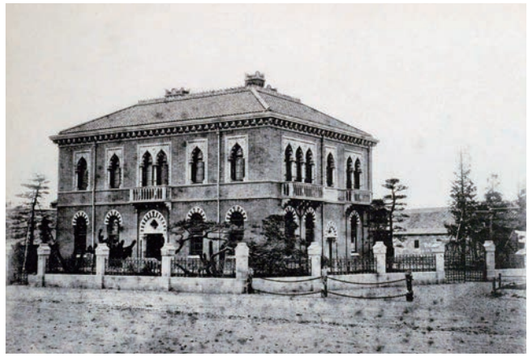
左：佐々木高行の肖像。『近世名士写真.其1』 国立国会図書館デジタルコレクションより　右：日本銀行の初代総裁 吉原重俊

今もその姿を留める日本銀行本館は辰野金吾が設計し、明治29年に完成した。『明治大正建築写真聚覧』 国立国会図書館デジタルコレクションより

益田克徳、小室信夫 実業家への転身

益田克徳は、三井物産の創業社長になる益田孝の3歳下の実弟である。父は幕臣、英語とソロバンに長じていたことが、兄弟の将来を決める。克徳も子どものころから英語を習った。使節団に司法省から派遣され、帰国後は判事、一時期は沼間守一らと自由民権運動に熱心に携わったが、明治14年の政変以降、渋沢栄一、岩崎弥太郎らの引きで実業界に転じ、東京海上火災保険の設立に関わり長く支配人を務めた。東京米穀取引所の所長、王子製紙、日本煉瓦、日本帽子などの経営に関与している。

左院から使節団に加わった小室信夫もまた、民権運動から実業の世界に身を置いた一人である。京都与謝郡の豪商の一族で山家屋の京都支店の主任を務めるころ、尊王攘夷運動にのめり込み、足利三代木像梟首事件にも絡んで、京都守護職に追われる身となり、転々と逃げ回り徳島の蜂須賀藩の牢獄に5年間幽閉される。維新とともに許さ



日本銀行開業当時（明治15年）の建物は、ジョサイア・コンドルが設計した。『明治大正建築写真聚覧』 国立国会図書館デジタルコレクションより

All Rights Reserved, Copyright ©2022, Hitachi, Ltd.

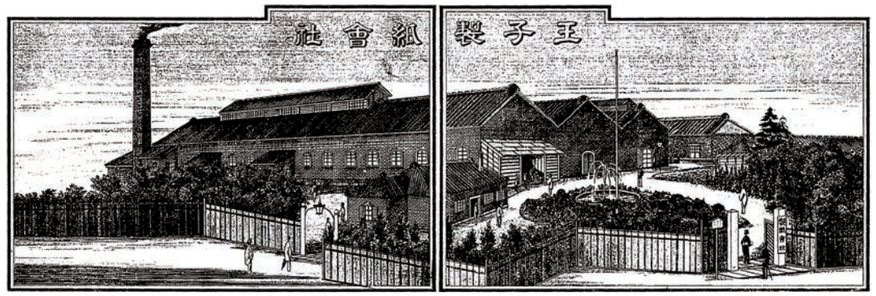
れて徳島藩士待遇で中央政府に出仕、福島県の参事になり藩行政の改革に尽力した。

欧州派遣時はとくに英国で立憲政治について学ぶ。帰国後は官を辞し、板垣退助、後藤象二郎らに誘われて「民選議院設立建白書」の起草に関わり、自由民権運動に傾倒していく。

しかし、明治14年の政変後、実業界に入り、北海道運輸の設立、共同運輸の設立に関わり、日本郵船の誕生の主要な役割を担っている。さらに、百三十銀行、奥羽鉄道、京都鉄道などの起業に絡み、重役や社長を務めている。

硬骨漢の佐々木高行 払い下げ計画に尽力

司法省の理事官として参加した佐々木高行は、土佐藩士、勤王派で藩主山内容堂の信任も厚く、大政奉還にも働いた重役クラスの武士だった。王政復古時には外国方として長崎におり、幕府の奉行河津伊豆守が公金を持って船で逃亡しようとしたとき、海援隊を率いて薩摩の松方正義らと取り押さえ新政府への政権移行をスムーズに成し遂げたという豪の者である。その後、中央政府に召されて大混乱のさなか困難な刑法業務に携わって功績を挙げ、明治3年には土佐初の参議に任ぜられた人物である。同行のメンバーの内では、岩倉具視、大久保と並んで保守派の棟梁といわれ、伊藤らの開明派とよく論争をした論客でもあった。



明治期の王子製紙会社。渋沢栄一が創業し、益田克徳らが経営に関わった。
『東京盛閣図録』 国立国会図書館デジタルコレクションより

帰国後は左院、元老院など公議機関に身を置くことが多く、漸進的開化をめざして活動したが、天皇親政への思いが強く明治天皇の侍補となって尽力した。しかし、明治14年の政変を契機に伊藤が宰相的な地位に就くと、佐々木は工部省の卿を命ぜられて主として官営事業の払い下げ問題に取り組むことになった。

なぜ、佐々木に白羽の矢が立ったのかといえば、この仕事は利権がらみで汚職につながる恐れがあったため、清廉潔白の硬骨漢が選ばれたものと推察される。実際、佐々木は明治18年まで4年間にわたりこの業務に精励し、以下のように大きな仕事を次々とやってのけた。それを一覧表にして示せば左頁のとおりである(「官営物払い下げ年次表」参照)。

佐々木は、明治16年に意見書を提出、その中で次のようにいっている。「官営では規則に縛られ商業に通じない官僚が担当するために利益が少ない」。そこで「事業を整理統合して不要な局は他省に移管し、工部省は道路・港湾など土木事業に絞る」と主張している。

省内の人事では工部大輔に鉄道事業のパイオニア井上勝、書記官長に岩倉使節団の随行者で鉄道にも詳しい安川繁成を配し、井上構想の鉄道事業を推進していく。

佐々木は正義漢と勤倹体質を買われての就任であろうか、その趣旨をよく貫き「官営の非効率性と商人の癒着を批判し、大規模な土木事業は国の運営にすべきだ」と具申した。政府が聞き置く程度の状況だと、構わず自らの考えで事を進めていった。当初、長州系の芳川顕正が少輔にいて仕事がやりにくかったが、途中から人事の刷新を図って佐々木が主導権を握って行われたという。この払い下げ計画は政府の財政難もあり佐々木の熱意とも相まって順次遂行された。

明治18年に内閣制度の確立により、工部省は解散、電信は郵便とともに逓信省へ、農業と商業は新たに設置された農商務省の管轄となり、鉄道は内閣直属の組織となった。

人と時代が彩る 産業近代化の懸け橋

明治日本はなぜ、このようなスピードで産業を近代化させえたのか。

また、太平洋戦争では大敗北を喫し亡国寸前までいきながら、大変なスピードで経済の再建と発展を成し遂げ、40年ばかりで米国に次ぐ世界第二位の経済大国にまでなり上がったのか。それは一体なぜなのか。

誰しもが抱く疑問であり、とりわけ世界中の後発国、開発途上国が抱く大疑問である。

それに明快に応える素晴らしい著作が刊行された。東京大学名誉教授 北岡伸一氏の『明治維新の意味』(新潮選書)である。北岡氏は国連大使を務めたあと国際協力機構(JICA)の理事長を務めている体験から次のように書いている。

「多くの途上国にとって、非西洋から先進国となり、伝統と近代を両立させている日本という国は、まぶしいような凄い国なのである。いつか日本のような国になりたいと思っている国は数多いのである」と。

そして、なぜそれができたかの答えを「明治維新における日本の近代化」に見いだし、「岩倉使節団の派遣」も取り上げて、こう述べる。

「明治維新以来の政治でもっとも驚くべきことは、日本が直面し

官営物払い下げ年次表

	払い下げ年	払い請け人
鉱山		
高島炭鉱	明治 7年	後藤象二郎（14年3月より三菱）
釜石鉄山	16年	18年 田中長兵衛買収
小坂鉱山	17年	久原庄三郎
同仁銅山	18年	古河市兵衛
大葛銅山	18年	阿部 潜
院内銀山	19年	古河市兵衛
三池炭鉱	21年	佐々木名義（23年より三井）
幌内炭鉱	22年	北海道炭鉱鉄道会社
佐渡金山	29年	三菱合資会社
生野銀山	29年	三菱合資会社
造船		
石川島播磨造船所	明治 9年	平野富二、植木嘉助
兵庫造船所	19年	川崎正蔵
長崎造船所	20年	三菱（ただし17年以来三菱借り受け）
化学工業		
深川セメント製造所	明治17年	浅野（ただし16年より浅野借り受け）
品川硝子製造所	18年	西村勝三など
繊維工業		
広島紡績所	明治15年	広島県、さらに広島綿紡績会社へ譲渡
愛知紡績所	19年	篠田直方
新町紡績所	20年	三井
富岡製糸所	26年	三井

出典：高橋亀吉『日本近代経済形成史』 第二巻

明治17年に久原庄三郎に払い下げられた小坂鉱山。
写真提供／小坂町教育委員会

水路、発電所、電気鉄道、電灯設備など、鉱山と町の近代化に小平浪平ら若い技術者が力を注いだ。
写真提供／小坂町教育委員会

明治5年に操業が開始された富岡製糸所。当時の製糸工場としては世界最大規模を誇った。
絵葉書「原 富岡製絲所全景／明治41年頃」 画像提供／富岡市

た最重要課題に政治が取り組み、ベストの人材を起用して、驚くべきスピードで決定と実行を進めていることである」と。

それは政治だけでなく経済産業面についても同様であり、また明治期だけでなく戦後についても同様であると私は思うのである。

本シリーズでの群像を顧みれば、明治における近代化の懸け橋については3つのことがいえるだろう。第一には、岩倉使節団のようなトップリーダー自らが調査隊に加わったこと。そして同時並行的に中堅の官僚や若い留学生を多数派遣したこと。第二は、高給を払ってでも外国人教師を招いたこと（戦後の途上国では先進国の援助で雇っている）。第三には、教育システムを整備して、それを国民一般に広く行き渡らせたことである。先行して学んだ日本人は、それを同僚・後輩によく伝え、青少年たちに教えたことである。それが日本人の才能を活性化し、「日本力」ともいうべき国民的な力を育んだのだと思う。

このシリーズでは岩倉使節団の群像に焦点を絞ったが、現実にはそれ以外も多くの人が海外視察に出かけ、お雇い外国人から学び、あるいは先輩に導かれて人材に成長していったのである。それは経済産業界の巨人たち、傑物たちを見ればおのずから明快だろう。その典型は渋沢栄一であり、岩崎弥太郎・弥之助であり、益田孝や五代友厚や大倉喜八郎であり、安田善次郎であった。政治家にも大隈重信や井上馨のような実業界と両生類のような存在があり、出自を問わず、大実業家となった古河市兵衛、川崎正蔵、藤田伝三郎、浅野総一郎などもいる。そして、知られざる素晴らしい技術者や実践者が多くいたことを認識すべきである。

日本人は才能があり、志を高くもてばすごい力を発揮するのだ。現代においても、危機感を抱き問題意識を抱けば、必ずや素晴らしい仕事をやってくれると期待したい。

歴史にはその手本になるような人物があまた存在している。その伝記類は必ずや貴重な知恵と勇気を与えてくれると思う。そのことを申し上げて終わりにしたい。

150年前、岩倉使節団が欧米へと旅立った横浜港・象の鼻地区にモニュメントはある。 撮影協力／横浜市教育委員会

「岩倉使節団が遺したもの―日本近代化への懸け橋」の連載は今号をもって終了となりますが、泉三郎氏が代表を務める「米欧亜回覧の会」では、岩倉使節団に参加した先人たちの足跡や偉業について考察を重ね、その詳細なデータベースを構築しています。また、今年は「岩倉使節団派遣から150年*」になるので、それを記念して年間を通じてセミナーやシンポジウムを開催しています。関心のある方は「米欧亜回覧の会」のHPをご参照ください。

http://www.iwakura-mission.gr.jp

泉 三郎 いずみ さぶろう

「米欧亜回覧の会」理事長。1976年から岩倉使節団の足跡をフォローし、約8年で主なルートを辿り終える。主な著書に、『岩倉使節団の群像 日本近代化のパイオニア』（ミネルヴァ書房、共著・編）、『岩倉使節団という冒険』（文春新書）、『岩倉使節団―誇り高き男たちの物語』（祥伝社）、『米欧回覧百二十年の旅』上下二巻（図書出版社）ほか。

＊寄稿時。